

同志社の創立者新島襄が目指したキリスト教主義教育とは

井上 勝也	同志社大学名誉教授
講師紹介【いのうえ・かつや】	

「同志社スピリット」と「キリスト教主義教育」

同志社スピリット・ウィークがキリスト教文化センター所長の鈴木直人先生のご尽力で二〇〇三年四月から始められ、今年で三年目になります。そこで「同志社スピリット」という言葉は新入生の皆さんには馴染みのない言葉ですので、少し説明しますと、これは明治二十二年に新島校長を慕って同志社英学校に入学した山室軍平が最初に使いました。この人は日本の救世軍の最高責任者になって、明治・大正・昭和の初めに貧民救済や人権保護といった今日の言葉でいえば社会福祉事業を一生の仕事にした人です。皆さんは年末京都の四条河原町角の高島屋の前で、軍隊調の制服を着て讃美歌を唄いながら大きな慈善鍋を置いて寄付を求めている人たちの姿を見たことがあるでしょうか。あの人たちが救世軍と呼ばれる人たちです。この救世軍の指揮官になった山室軍平が同志社英学校に学んでいた明治二十二年～二十三年頃の同志社には「同志社スピリット」があふれるばかりであったと言ったことがこの言葉の起こりであります。この場合山室は「同志社スピリット」を「神を愛し、人を愛し、そのために『凡（スベ）ての者の僕（シモベ）』として奉仕する基督教精神」というように定義しています。この同志社スピリットは創立者新島襄が九年間のアメリカとヨーロッパでの生活で学びとったものであります。新島在世中の同志社英学校で学んだ当時の生徒たちは新島校長がしばしば「世の中のため」になる生き方をしなさい、そして、「社会事業は神の委託事業です」といったというのです。今日の言葉でいえば社会福祉事業は神様が我々に委託されている事業だということです。苦しんでいる人、悩んでいる人、困っている人に手を差し伸べることは神様が最も喜ばれる行為だということです。このような教育を受けた当時の生徒の中から先ほどの山室軍平や非行少年の教育に生涯を捧げた留岡幸助といった人たちが同志社から多く出ています。これは同志社と慶應や早稲田、いわんや東大や京大との大きな違いです。

二一世紀の同志社大学は創立の原点を再確認しつつ、新入生の皆さんが四年間の学生生活を始めるにあたって同志社スピリットとは何かを知っていただきたいと考え、一週間にわたって色んな人が色んな角度から同志社スピリットを語ることになりました。

今日、私は同志社スピリットの中核を占める「キリスト教主義教育」とはどういう教育のことをいうのかをお話したいと思います。

ニューイングランドにおける新島襄

幕末江戸で生れ育った新島は二十一歳の一八六四（元治元）年、函館から密航を企て、翌年アメリカのボストンに着き、ニューイングランドの名門校であるフィリップス・アカデミーに編入学して二年弱在学し、その間寮に入らずにピューリタンの家庭にホームステイをしています。卒業後アーモスト・カレッジに学び三年間在籍してbachelor of science（理学士）の称号を得て一八七〇年に卒業しました。その後彼は宣教師になるためにアンドーヴァー神学校に入学し、ニューイングランド神学を研究しました。在学中、岩倉使節団のメンバーに加わり、一年余アメリカを始めヨーロッパ七カ国の教育制度や施設を見て廻りました。以上のような体験が新島に教育とキリスト教による近代国家の形成という結論に到達させるのですが、それは後ほど詳しく述べます。

ここでアメリカの歴史を少し申しあげます。新島が主に生活したニューイングランドは信仰上の自由を求めてピューリタン（清教徒）と呼ばれる人たちがメイフラワー号に乗り大西洋を渡って一六二〇年にプリマスに上陸し、植民地経営を始めました。彼らはこのアメリカ建国の中心地であるボストンに早くも一六三六年に最初の大学ハーヴァード・カレッジを創りました。義務教育制度もこの地方にはアメリカで最も早く一九世紀の前半にスタートしています。

リンカーン大統領が一八六三年ペンシルヴァニア州のゲティスバーグでおこなった演説で「人民の人民による人民のための政治」（government of the people, by the people, for the people）という有名な表現を用いました。これはアメリカの民主主義の定義だといわれています。この演説は新島がニューイングランドに到着する二年前のことです。アメリカの内戦である南北戦争が一八六一年から六五年までの四年間続き、一〇〇万人の死傷者を出しましたが、その間の一八六三年にリンカーン大統領は奴隷の解放を宣言し、六五年に合衆国憲法上でも奴隷制の廃止が規定されました。

以上のように見てきますと、新島はキリスト教、とくにピューリタニズム（清教徒主義）とデモクラシーが盛んで、教育の関心が高いニューイングランドでピューリタンと共に生活し、中・高等教育と神学教育を受けて彼の間人観・教育観・国家観を形成したということが出来ます。

幕末の内憂外患の激動期に青年期を過ごした新島は祖国日本がアヘン戦争によって国家主権を奪われた清国の二の舞になることを恐れていました。そこで日本を改革し、自ら国家のリーダーにならんとし密航を企て、近代国家アメリカを研究しようとしたのです。当時の日本の留学生が欧米で学んだものは近代国家建設のノウハウ、即ち実際の知識と技術でしたが、新島はアメリカで実際の知識や技術よりも近代国家を創り出した人間に目を向け、彼らの生き方を規定しているキリスト教やデモクラシーや教育に関心を抱きました。新島は密航を企てる前に既にキリスト教についての知識を持ち、その本質をかなり理解していたふしがあります。彼はキリスト教を自由に学びたいと思ってやってきたニューイングランドで、人びとが日常的にキリスト者として生きている、キリスト教が彼らの生活を規定している実際の状況を日々目の当たりにしました。彼は江戸の世界とは違ったニューイングランドで受けたカルチャー・ショックを克明に父親宛の手紙に書き送っています（『新島襄全集』3 ミー三三七頁）ので、主なものを列挙しますと次のようになります。ニューイングランドの人びとは極東からやってきた異邦人である新島を同じキリスト教を信ずる同胞・兄弟として家族同様にもてなし、彼の生活費や学費を出してくれる。当時の日本の若者がいばって、天下国家を語りながらも、私生活において放蕩の限りを尽くすといった矛盾した生活をしているのに対して、新島の眼に映るニューイングランドの若者、とくにアンドーヴァー神学校の学生は言うことごとく一致して、品行方正である。村に貧しくて寄る辺のない人がいると養老院に入れ、不自由のない生活を保証する。通りは歩道と車道に分けられ、歩行者が馬車にはねられないように工夫している。溝には蓋がしてあり、子どもが落ちて流されないようにしている。各々の家には避雷針があって落雷しないようにし、またストーブには煙突があり、部屋に煙が充満しないように工夫している。村には小学校を設け、授業料をとらないので、貧しい家庭の子どもたちも自由に学べるようになっている。街でフィリップス・アカデミーの校長さんやアンドーヴァー神学校の教授に出会うと、彼らの方から生徒である新島に近づいてきて、「新島さん、お元気ですか？」と尋ねてくれる。以上のように新島はニューイングランドに到着して以来 異文化体験を日々重ねてきましたが、彼は「三尺下って師の影を踏まず」といった日本の縦社会とは異なった横社会―人間を大切にし、平等視するデモクラシーの社会に強い関心を示しました。結局ニューイングランドの人びとは一人一人の人間を大切にし、人間の幸せの増大を価値基準にして生きている。そしてプロテスタント・キリスト教もデモクラシーも教育も、人間のもてる能力を開発して自らの属する社会をよくし、国家を索引する中心になろうとする人びとの形成に寄与していることが新島にはわかってきました。またニューイングランドの人びとにとって政府や国家は彼らの生命・財産や基本的人権を守り、国民を幸せにするために存在するのであり、そのような政府や国家をつくるために献身努力することをいとわず、皆が共生する―共に生きるために常に全体のことを考え、全体と個の関係を正しく理解している人びとであることも新島は認識するのである。

「神ノ意ヲ体シタ人」

新島が学んだフィリップス・アカデミーにしてもアーモスト・カレッジにしても神を愛し、人を愛し、すべての者の僕（しもべ）として奉仕する人間の育成が教育の目的になっていたといえます。これらの教育機関では生徒や学生はトータルな人間、片寄りのない人間、木を見て森も見ることのできる人間になることが目指され、知性を磨き、道徳性を磨き、健全な知性と道徳性の宿る器としての強靱な肉体を持ち、noblesse oblige―即ち高い身分や教育を受ける者は勇氣や慈愛や寛大や高潔な徳を備えて、そうでない人に手を差し伸べる義務を負うという倫理観を身につけた人間になることが求められました。

これらの学校のカリキュラムを見ますと、第一の特徴は人類の知恵ともいえるギリシャ・ローマの古典（classics）が多く使われていることです。ギリシャ・ローマの哲学者や文学者は人間を立体的にとらえ、人間の自主性、主体性を培うことに力を入れ、自力で難問を解き、自己の知性をフルに活用して何が正しいかを見抜き、真理にもとづいて行動する人間を描きました。二番目の特徴はキリスト教に関する行事が多いことです。造化の妙理、即ち天地万物を造りたもうた造物主の巧みさ、不思議さを悟らしめるために安息日の礼拝や祈祷会はもとより聖書の授業があり、新約聖書に説かれているキリストや弟子たちの言行を学び、自己の信仰の確立と道徳性の陶冶を目指すものでした。第三の特徴は各学年で演説法が必修で、演説会がしばしば開かれているということです。自分の考えを多くの人びとの前で述べ、自分の考えに片寄りがなく、人びとに共鳴を与えることができるかを学ばせて、将来のリーダーを養成しようとしていることです。第四の特徴は各学年で体育が必修になっていることです。「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」“A sound mind in a sound body”というギリシャ・ローマの時代から重視されてきた精神と肉体の統合、知・徳・体の調和を通して自立した人間の育成を目指していることです。

以上のように新島襄は青年の思想形成期に九年もの長きにわたってアメリカ、ヨーロッパの近代国家で生活し、そこで高度な学校教育を体験しました。彼は密航目的の一つに近代国家形成の秘密を探りたいという願望を持っていましたが、幸いにもニューイングランドの文化や彼が学んだ学校で秘密を解き明かすことができました。その秘密とは共同体を構成する一人一人が、まずは自己教育に努め、自分の立脚点を固めると共に、共同体の発展に直接貢献する能力と行動力をもった人間に自己を教育することにあるということです。このような人間とは新島にとってまず「神ノ意ヲ体シタ人」であります。神の意を体するとは自分がいと小さなとるにたらない存在であるにもかかわらず、神は自分を愛してくださっている、共にいて励ましてくださっていることを自覚し、聖書とりわけ新約聖書に説かれているイエスの生き方に一歩でも近づきたいと考え努力する人間であります。新島の言葉を用うれば、次

のようになります。「神ノ意ヲ体セバ人必ラズ広ク人ヲ愛シ人ノ為ニ何事モ為シ、カラテ人ヲ制セズ、威ヲ以テ人ヲオトサズ、強シ而弱キヲ扶ケ、知アリテホコラズ、貴シ而益遜（ヘリクダ）リ、富テオゴラズ、賤シテ卑屈ニ流レズ、貧シテ貪（ムサボ）ラズ、甘シテ人ノ罵詈（バリ）ヲモ受ケ、克（ヨ）ク人ノ無礼ヲ許シ、人ノ幸福ヲ計テ日モ不足ラズ、神ノ義ヲ慕（シタツ）テ死ニ至ル迄不止（ヤマズ）」（『全集』1 三四七頁）と申しています。そして「人若（モ）シ此点ニ達セバ実ニ君子ト称シテ可ナルベシ」（同上）ともいっています。これは新島が一八八〇（明治十三年）年におこった講演草稿の一節ですが、彼の教育は究極のところ、このような君子、今日の言葉でいえばgentleman & ladyにあたるでしょうか。このような人物の育成こそ近代国家の形成に不可欠であると考えていたといえます。新島に学んだ或る卒業生の思い出ですが、新島は授業でgentlemanを説明するにあたって次のようなエピソードを紹介しています。新島が或る日ボストンの街を歩いていると、走ってきた馬車にはねられそうになった婦人がいました。その時とっさに男性が婦人を抱きかかえて、事なきをえました。遅れてやってきた婦人の夫と思われる男性が助けてくれた男性に“Thank you very much. You are Gentleman.”といったのです。新島はgentlemanとは人に奉仕し、犠牲的精神を持った人をいうのだといったかったでしょう。これは西洋の騎士道を思い出させるエピソードですが、このgentlemanこそ「神を愛し、人を愛し、そのために『凡ての者の僕（シモベ）』として奉仕する基督教精神をもった人」だといえます。

新島の「キリスト教主義」教育

新島は一八七四（明治七）年帰国し、一八九〇（明治二十三年）年亡くなるまでの十五年間、上述のようなgentleman & ladyの育成に邁進しました。明治近代国家の形成に機関車役として貢献する人物、新島の言葉をうければ「良心を手腕に運用するの人物」（『全集』1 一三二頁）であり、「一国の精神となり、元気となり、柱石となる所の人々」（同上四〇頁）の育成を新島はフィリップス・アカデミーやアーモスト・カレッジで学んだ方式でもって同志社英学校で実践しました。

新島はキリスト教が生徒の道徳性の陶冶に不可欠であることを認めつつ、「基督教主義を以て徳育の基本と為せり」（同上二三二頁）と申して、キリスト教ではなくキリスト教主義という表現を用いています。彼は神の言葉としての福音を生徒に宣べ伝えることだけで彼らがキリスト教を理解し、キリスト教の精神をもって生きる人間になるというように狭く考えていませんで、もっと広い意味でとらえていたと思われます。私流に解釈すれば、彼はキリスト教を生けるキリスト教、人間のためのキリスト教、人間に生き方を指し示すキリスト教、豊かな人間性を培うキリスト教といった、人間が生きる上での灯台のような役割をもったものと考えていました。そしてイエスの説いた人間の生き方、考え方、ものの見方は聖書を通してしか理解することができないというのではなく、たとえばキルケゴールの哲学思想や、遠藤周作の文学作品やレンブラントの絵画やバッハの音楽を通して表現されている「キリスト教的なもの」、いいかえれば聖書から派生しながら聖書の、そしてイエスの真髄が思想や文学や芸術などを通して表現されているものも、キリスト教主義の範疇に含むと新島は考えたと思います。そして同志社英学校では新島校長のパーソナリティーにひかれてキリスト教に接近していった生徒が沢山いたように、イエスに一步でも近づこうとして生涯努力したキリスト者の生き方や思想もキリスト教の何たるかを教える上で格好の例になると考えました。

このような幅広い解釈が可能なのは、新島が学んだフィリップス・アカデミーやアーモスト・カレッジで生徒・学生に全人教育を目指すリベラル・アーツの教養科目が沢山提供され、また生徒・学生の自主的な知的啓蒙活動の場（literary society）が重視されたからであります。新島は彼が学んだフィリップス・アカデミーやアーモスト・カレッジがそうしていたように、自己コントロールができて他者のこと、共同体のことを自分のことのように真剣に考える人間を育成するには人類が古代ギリシャ・ローマからルネサンスを経て求め続けてきた「全き人間」の形成を目指すとともに、全き人間と先ほどの「神ノ意ヲ体シタ」人間が融合合体しなくてはならないと考えていたように思われます。ギリシャ・ローマ的なものとキリスト教的なものの融合合体した人間とは新島がいみじくもいうように「独自一己の見識を備へ、仰いで天に愧（ハジ）ず、俯して地に愧ず、自から自個の手腕を労して、自個の運命を作為するが如き人物」（『全集』1 一三八頁）であります。このような主体的な人物は神の声としての良心に忠実で、知性、感性を研ぎ澄まし、真理を見抜く鋭い眼をもち、真理にもとづいて行動する勇氣と実行力を持ち、他者を思い、全体の発展のために喜んで自己を捧げる人間であります。

新島は岩倉使節団の田中不二麿と共にアメリカ、ヨーロッパの教育視察の途中で、国民教育論について面白い議論をしています。新島の考えは次の通りです。

「個人が良き市民（a good citizen）になるためには知性的でなければならないが、知性は道徳的に自己を制することができない。知性のみで道徳原理をもたなければ（中略）彼の鋭い知性は鋭いナイフのようになるだろう。彼は隣人を破滅させるだけでなく、自身も滅ぼすであろう。そのような破滅をきたす知性を抑える道徳原理が存在しなければならない。というのはもし人が道徳原理をもてば彼の知性を正しく用いることができるからである。（中略）教育のみで人間を有徳にすることはできない。キリスト教には人間を自由にし、活発にし、有徳にする力がある。もし人が徳を愛するならば、彼は誠の人である。自己を制する方法を知っている。（中略）国民の力は彼らの徳と敬神の力である。キリスト教には真理がある。我々は単なる方便としてではなく、それが真理であるがゆえに、真理に従わなければならない」（Life & Letters, pp. 127 - 129）。

これらの文章に新島の教育的信念を読み取ることができます。彼のいうように知性のみでは人間を道徳的にすることができないのです。キリスト教には人間を有徳にする力があるがゆえに、教育はキリスト教のもつ道徳性を用い、神の意を体した人間にまで教育しなければ、本当の君子、即ちgentleman & ladyに教育することができないと新島は考えていたように思います。

以上の如く、新島の考えたキリスト教主義教育はキリスト教教育よりも幅があり、奥行があります。全人教育－即ち知育・徳育・体育の調和の上に立ち、キリスト教倫理によって自己の道徳性を確立し、膨大な知識を正しく運用する理性と感性をもった人間、そして他者を思い、共同体の現状と将来の改革に貢献することのできる人間を育成することがキリスト教主義の目的であると考えていたのではないでしょう。

今日の日本・今日の世界の中で

さて皆さんは日本の社会をどう見ておられるでしょうか。現在格差社会という言葉が広がっています。一九八〇－九〇年代の一億中産階層を志向する社会から、現在は億単位の年収を得てリッチな生活をしている人びとと、努力しても二〇〇万円の年収しか入らない人びとのように大きな格差が生まれています。東南アジアやアフリカでは一日十時間一生懸命に働いても一ドルにしかならない人が何億人もいて、一ドルが一日の家族の生活費になっています。日本は地震の活動期に入り東南海域域に大きな地震の発生が予測されています。マラッカ海峡の周辺の国々では地震や津波で家を奪われ、家族を奪われ、仕事を奪われ、呆然自失している数百万人の人びとがいます。アフリカでは宗教上、イデオロギー上の対立や民族対立で家を焼かれ、村を追われ、着のみ着のままで難民になって他国に逃れている人びとが何百万人もいます。エイズに感染して死の恐怖と闘っている人が地球上に一千万人以上います。テロで生命を奪われる人も日常的になりました。

このような日本や世界の状況の中で、自分だけは生き延びることができる、自分の幸福しか眼中にないと考える人びとが増えています。本当に自分だけは生き延びられるのでしょうか。自分の周囲の人びとが苦しみ、悲しんでいるのに、自分だけ幸福に生きられるのでしょうか。

我々は最も小さい共同体としての家族から、最も大きな地球まで大きさは異なっても共同体の中で生活しているのです。人間はこの共同体から逃れられないことを肝に銘ずるべきです。かけがえのない地球がどんどん病んでいます。大気汚染、温暖化、集中豪雨といった異常気象が頻繁に起こり、地球の資源が枯渇し始めています。持続可能な発展を真剣に考え、それに取り組まねば二、三十年後の地球は極めて深刻な事態になっているでしょう。

ギリシャ人は知恵者でした。自分の自由や幸せや生命を守るためにも他者や自国の現状と将来に積極的にかかわり、デモクラティアー民衆の力としてのデモクラシーの実現に努力しました。彼らは共生（living together）の重要性を認識していたのです。

同志社の創立者新島襄は一八七五（明治八）年、同志社英学校で人類の知恵を体得し、共に生きる方法を実践する人物の育成を始めました。それがこれまで述べてきましたような「キリスト教主義教育」であります。二一世紀の日本や世界の状況を考えますと、ますます新島のいうキリスト教主義教育が重要性を増しています。同志社大学での四年間の学生生活はあっという間に過ぎ去っていきますよ。どうぞ積極的に授業に、クラブ活動に、キリスト教文化センターが提供しますチャペル・アワーや公開講座などに参加してください。新約聖書のマタイによる福音書に次のような聖句があります。

「求めよ、そうすれば与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすればあけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである。」（口語訳・マタイによる福音書 七章七－八節）

何でもチャレンジしてください。同志社大学は皆さんが求めるものを十分に与えることのできる大学です。皆さんの学生生活が実り豊かなものになりますようお祈りしています。ご清聴ありがとうございました。